

『金瓶梅』にみられる住まいの空間構成と 女性の領域に関する研究 内部空間と家具について

藤原美樹* 石丸 進** 松本静夫*

Study on Room Arrangements and Women's Territory in The Novel " KIN PEI BAI"
Interior and Furniture

Miki FUJIWARA* Susumu ISHIMARU** Shizuo MATSUMOTO*

ABSTRACT

The "KIN PEI BAI" is known as one of the four most valuable books in Chinese classical literature and is said to be written in the middle of Banreki years of the Ming period. In this paper the order maintained by a wealthy feudal family is examined in relation to room arrangements, considering the relationship between the ceremony of marriage, one of the ritual initiations, and women's territory. Consequently next five points become clear: 1) The territory of women is divided according to their status in a house, such as a wife, a mistress and a maid. 2) A woman's room is divided by fences and walls, and is also isolated from a society. 3) Special furniture is installed in a salon and a woman's room, when they are changed to a place of a ceremony. 4) As for pictures in folding screens, a public room is mainly arranged with "Sansuiga", and others are also arranged with "Kachouga". 5) Women's territory in a house is "like a Utopia" for a man.

キーワード: 人生儀礼, 公的場所, 私的場所, 家具, 室内構成要素
key words: Life Ceremony, Public Place, Private Place, Furniture, Interior Element

1. はじめに

『金瓶梅』は、明の万暦(1573-1620)中期、16世紀の終わりに書かれた長編小説である。はじめは鈔本(写本)で流布したが、1610年(万暦38年)ごろ蘇州で初版が刊行された。

テキストには、出版後まもなく別人が手を加えた改訂本と原作に近いとされる『金瓶梅詞話』の2種類がある[1]。

本稿は、『金瓶梅』の小説[2]および挿図[3]を資料として、『金瓶梅』の建築的場所について、大廳(dà tīng, 以下大厅)および妻妾たちの部屋(臥室, wò shì, 寢室, 客間)を中心に住まいの内部空間と家具について考察する。

これまで、拙稿[4]において、妻妾と使用人で構成されている家族、住まいの「内」と「外」における男性の生活、妻妾たちの「内」の中の「内」における生活および儀礼の過程、妓院にみられる妓女たちの役割、その室内構成と非日常的な

仙界的場所について明らかにしてきた。

2. 「雅」と「俗」について

中国知識階級の生活文化(17世紀前半)の基本的文献といわれる『長物志』に家具の位置(書画, 家具, 骨董類の配置の意)の法則に関する記述がみえる。「位置の法則は、複雑な場合と簡単な場合とで一様でなく、寒季と暑季の時季とでそれぞれ異なり、高い堂(高大な奥座敷), 広い榭(高台に建てた建物)と、隠し部屋(原文は曲房)・奥まった室(原文は奥室)とでは、それぞれふさわしさがある。書画や書籍に鼎彝(骨董)の類でも、置場所が適切であつてこそ、初めて絵になる。」とある[5]。この書物は、衣食住、清浄・静寂な居住空間の実現を目的とする「室廬」や花木石の役割などの規則について書かれ、文人[6]の生活全般にわたるものであり、家

*建築学科 ** 建築学科非常勤講師

具配置の重要性について述べられている。「室廬」としては、「山水の中に住むのが最もよいとされ、村落の住まいがその次にされる。市井では、門庭は風雅高潔、室廬は清浄静寂、亭台は悠然たる士の思いをそなえ、齋閣は幽居の人の趣が必ずなくてはならないとされる。佳木怪竹を植え、金石書画をならべ、住むものには老いを忘れ、立ち寄るものには帰りを忘れ、遊びに来る者には退屈を忘れさせて、うだる暑さにもさやさやと涼しく、厳しい寒さにもぼかぼかと暖かくあるべきだ。」とある。文人は、幽・閑・清・雅をむねとする価値観をもつとされ、身の回りの道具を網羅的に論じ、「雅」なもの「俗」を厳しく区別する。

これまでの研究より、西門慶は、建築された翡翠軒、卧云亭をはじめとする庭園内の多くの建物や庭園の梅蘭菊竹あるいは室内の書画や山水画などより、隠逸を理想としていたことがわかる。隠逸とは俗世を離脱し、真なるものに到ることである。それは、当時の富豪や文人たちの象徴である。園主の多くは、役人、商人である。西門慶は、はじめは、葉屋を開いているにすぎなかったが、数年もたたない内に緞子屋、絹屋、糸屋、質屋などの店舗を拡大し、莫大な財産を築き上げた。また官僚の地位にもつき、財力を手に入れることで、俗世間から離れた、人工的山水である園林(庭園)を所有した。

3. 家具の種類

明式家具は、種類、構造などの面において、華やかで独自の風格を形成し、中国家具の歴史的な高峰であるされる。この時代に園林建築が大きく発展し、多くの家具を必要とすることから、園林の発展は、家具の発展を促進した。

明式家具の種類と形式は、次のとおり分類できる[7]。

3-1 椅凳類

背凭れのない椅子として、凳(図1-3, 5), 杌(図4), 墩(図6)があり、凳の代表的な形式として、条凳, 長方凳(坐面が長方形), 方凳(坐面が正方形), 梅花凳(坐面が梅花形)などがある[8]。凳や墩は、移動性があり、都市部、農村部で広範囲に使用されている腰掛である。室内外で食事、碁など多様に使用できる。挿図より、庭園における囲碁などの遊戯の際に使用する腰掛けは、墩であることがわかる。背凭れのある椅子の形式は、灯挂椅(図7), 四出頭官帽椅(図8), 南官帽椅, 靠背椅(図10), 交椅(校椅とも称する, 図11, 16回), 圈椅(図12)などがある。『金瓶梅』に見える杌は、杌子(2回, 28回), 凉杌子(27回), 錦杌(32回)などの名称がある。交椅は、螺甸交椅(34回)などがみえる。

凳子の起源は、漢・三国時代である。当時は、凳子という語はなく、「胡床」と呼ばれていた。唐代には、凳子の様式が多くあり、座面が正方形のものを「方凳」といい、長方形のものは「板凳」といわれた。板凳は、宋画「清明上河図」に一卓二椅(一脚のテーブルと二脚の椅子)の基本的形式が見られる[9]。長方凳は、條凳, 二人凳, 春凳の三種類に分類できる。春凳は、坐具と卧具を兼ねる広い坐具である(琴

光漆春凳, 図35)。

3-2 桌案類

桌案類は、桌, 案, 几に分類できる。桌の種類は、条桌, 炕桌(29回), 壁桌, 書桌, 方桌, 油桌, 琴桌(36回), 棋桌(36回), 八仙桌(32回)などがある。案の種類には、平頭案, 翅頭案, 條案, 書案, 本案(18回)などがある。几の種類は、小桌几, 炕几(炕上におく), 香几(28回), 花几, 茶几などがある。炕几は、炕の上に設え、食事などを行う小さな台であるが、用途は、わが国の座卓と類似する家具である。

琴桌は、琴を置く桌子であり、園内に琴桌に類似した、石凳琴台という名称の琴台がみえる(54回)。また、女性の化粧用のための几案として、妝台(28回)がある。

3-3 牀榻類

牀(床)は、坐具と卧具を兼ねる家具である。牀類は、大床, 拔步床, 架子床であり、榻には、羅漢床がある。『金瓶梅』の床類は、南京描金彩漆拔步床(8回), 雕漆床(15回), 螺鈿床(15回), 描金暖床(55回), 涼床(58回), 泥金暖閣床(71回)などの名称がみえる。

3-4 櫃架類

櫃は、衣櫃, 櫥櫃などがあり、わが国の戸棚, 箆箆に類似し、大型の家具である。櫥には、閤戸櫥, 矮櫥などがある。閤戸櫃は、引出し付きの卓上の両端に筆返しに類似する装飾が施されている。台架は、燈架, 衣架(衣桁), 面盆架(手洗用の盆を置く台架), 鏡架(37回)承足(脚踏, 31回, 床脚踏板)などがある。

3-5 屏風類

屏風類には、座屏風, 團屏風, 插式座屏風, 小座屏風などがあり、木屏のほか大理石(7回)を使用したものがある。

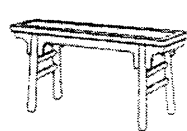


図1 条凳

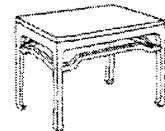


図2 長方凳

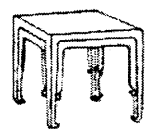


図3 方凳

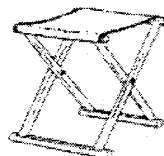


図4 交杌



図5 梅花凳



図6 梅花墩

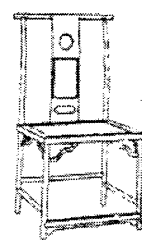


図7 灯挂椅

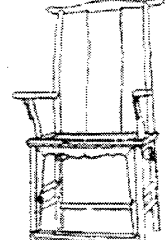


図8 四出頭官帽椅

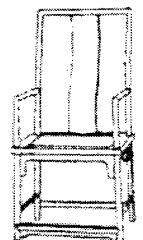


図9 扶手椅

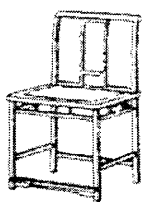


図10 靠背椅

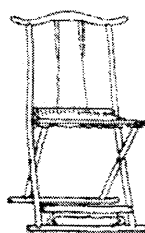


図11 交椅

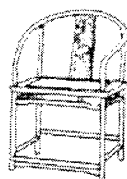


図12 圈椅

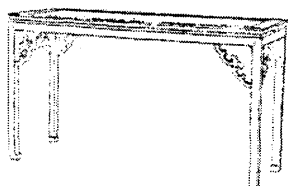


図13 条桌

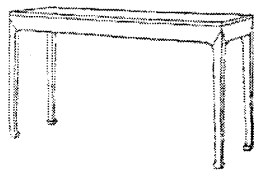


図14 琴桌

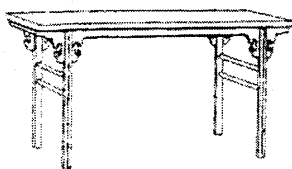


図15 平頭案

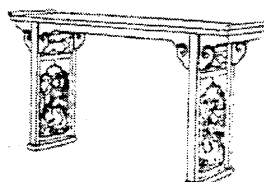


図16 翘頭案



図17 炕桌



図18 炕几



図19 琴几

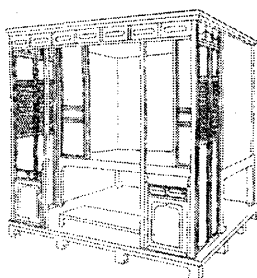


図20 大床

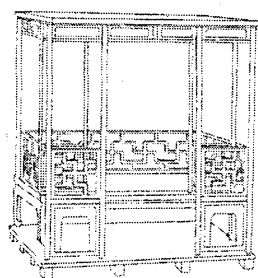


図21 拔步床

4. 大厅にみえる家具

『儀礼』に示される、祭祀、婚礼、葬礼などの儀式や行為は、決められた場所、順序、動作を遵守することが重要である。儀礼の中心となる場所は、大厅である。大厅は、対外的には、儀礼・接客・饗宴のための公的な場所として使用される。邸内において、大厅より北側の建物群は、夫人たちの住まいなどの私的な建物である。

元来、厅は、聽(聴く)行為を指し、のちに聞く場所を指すようになった。古くは、廷・庭といったところで、事を聴き、裁判などを行い、官府の政務を執る役所を厅といった。六朝時代に広いという意味が加えられ(李斗『揚州画舫录』)、廳となり、簡略化され厅と称された。また、『大広益会玉篇』(梁 205-557・字書)に「客廚なり」とあり、客間の意となった[10]。

大厅は、「薛嫂推开朱紅搨扇，三間倒座客位，正面上供養着一轴水月觀音，善財童子(7回)。」、「原来二門西首有三間倒座，来往杂人都在那里待茶(30回)。」や「(郑愛香儿)見西門慶到，笑吟吟在半門里首迎接进去，到于明間客位，道了万福(59回)。」、「西門慶听了，即出小客位内坐，令左右放下帘儿(69回)。」にあるように、「倒座」、「客位」などと称されることがわかる。

第六夫人として輿入れ(19回)した李瓶兒の親戚顔合わせのお披露目の儀礼が大厅で行われた(20回、図23、24)。

「官客在新蓋捲棚内坐的吃茶，然後到齊了，大廳上坐」すなわち、「男性客は新築の捲棚に腰をおろして、お茶を飲み、大厅へ行く。」とある。捲棚の名称がみられるのは14回で、李瓶兒が潘金蓮に輿入れ後の住まいについて聞く場、李瓶兒：「西門爹幾時起蓋這房子？」潘金蓮：「前者央陰陽看來，也只到這二月間興工動土，收起要蓋。把二娘那房子打開，通做一處。前面蓋山子捲棚，展一個大花園；後面還蓋三間玩花樓，與奴這三間樓相連做一條邊。」であり、「新蓋一種 沒有正脊」より、これはわが国の「棚」の意ではなく、新築された正脊のない建築物であり、また「江南园林建筑多喜用歇山卷棚式屋顶，因无正脊而有轻逸流畅的美感。」[11]より、この屋根の形式は園林建築に多く用いられることがわかる。

また、「…進入儀門，轉過大廳，由鹿頂鑽山進去，就是花園角門；抹過木香棚，兩邊松牆，松牆裏面三間小捲棚，名喚翡翠軒，乃西門慶夏月納涼之所。前後簾櫳掩映，四面花竹陰森，周圍擺設珍禽異獸，瑤草琪花，各極其盛。書齋内の設は、…裏面一明兩暗書房，…伯爵見上下放着六把雲南瑪瑙減金釘藤絲甸矮矮東坡椅兒(帶有靠背的交椅)，…一邊一張螳螂蜻蜓脚一封書大理石心壁畫的幫卓兒(壁桌，供擺瓶爐玩器等)，…一張大理石黑漆縷金涼床，掛着青紗帳幔；綠紗帘下安放一隻黑漆琴卓(長形小桌)，燭燭放着一張螺甸交椅(34回)。」より、翡翠軒の屋根形式は、捲棚であることがわかる。正脊のある屋根形式の一例の硬山と捲棚の図を示す(図22)。

翡翠軒の明間室内の家具は、東坡椅子6脚、大理石の板を載せた壁桌、その上には香炉が置かれる。東坡椅子は、脚の短い、背凭れ椅子で籐製のものなどがある[12]。大理石のまわりに金をいて鑄込んだ黒漆塗りの手すりをめぐらした涼床(夏用の寝台)。そして、窓の下側には、琴卓と交椅が陳設されている。また、藏春閣には、醉翁椅なる椅子が設えられる(67回ほか)。醉翁椅とは、前後に揺れる背凭れ椅子の形式である[13]。東坡椅子、醉翁椅ともに大厅や女性の寝室などには設えられておらず、主として書齋や妓院に設える家具で

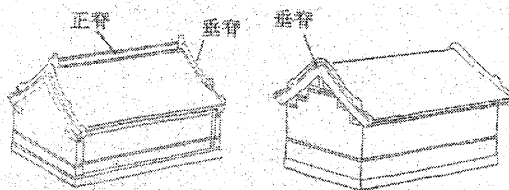


図22 屋根形式の一例 硬山(左) 捲棚(右)

あるが、現在、図示された史料は見当たらない。

大厅では、「西門慶家中吃會親酒，插花筵席，四個唱的，一起雜耍步戲。」すなわち、四人の芸妓と芸人の一団がよばれ、親戚顔合わせの儀礼が行われた。男性客用に第一席から第六席まで方卓が設えられ、主人席(主位，主人的席位)には西門慶が座る。明代(崇禎年間)挿図(以下，崇禎本)では，方卓の下部は，桌圍(張挂于桌子正前方的布帛，用以遮蔽桌子下部空間)で覆われている(62回)。また，78回には銷金桌帋なる語がみえる。室内中央には，縫取りの敷物が敷かれる。崇禎本では，大厅の祝宴場所は，屏風(衝立)により囲まれる。中央は敷物が敷かれ，楽器を奏でる妓女たちに囲まれながら李瓶児が登場する。『清宮珍宝百美图』以下百美图(図24)の室内の様子は，掛け軸が掛かる壁に沿って，翹頭案がおかれ，案上には花瓶や小香几がみえる。この小香几は，「四足高束腰

小方香几」とよばれる型式である[14]。

百美图にみえる條案は，図25—図32に示す。老王婆の茶坊(茶館，図25)と西門慶邸の大厅(図26，27)の條案は，翹頭案であり，妓院や夫人の部屋の條案は，平頭案(図29—31)や扇面卓(月牙卓の類，図29)が設えられる。

翹頭案は，條案の種類のひとつである。案面の両端が平たいものを平頭案といい，案面の両端に裝飾(飛角，日本の違い棚にみえる「筆返し」に類似する)が施されているものを翹頭案という。翹頭案は，儀礼的な要素をもち，大厅には不可欠の家具であることがわかる。

大厅の室内には，書籍を積み上げた书格(本棚)がみえる。百美图は，崇禎本を底本として描かれているが，これは，崇禎本挿図にはみえない家具である。书格は大厅ではなく，書齋に置かれる家具であるが，『金瓶梅』の時代による評価の違いにより，百美图に描かれたものと考えられる。



図23 樓幫閑趨奉開華筵(20回) 崇禎本挿図



図24 樓幫閑趨奉開華筵(20回) 百美图挿図

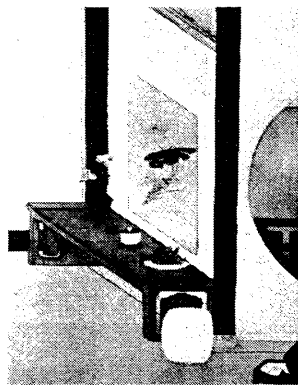


図25 老王婆茶坊説技(2回)



図26 寄法名官哥穿道服(39回)

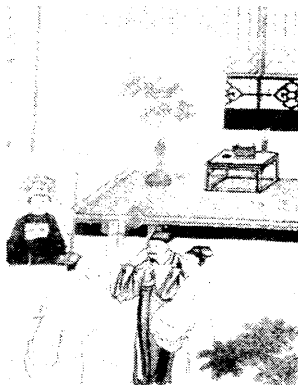


図27 韓畫士傳真伯遺奕(63回)

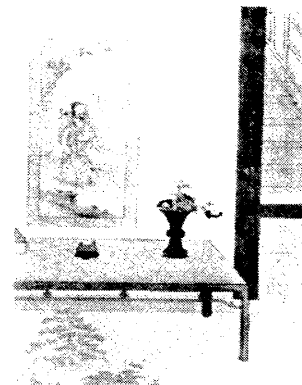


図28 韓愛姐翠館遇郎(98回)

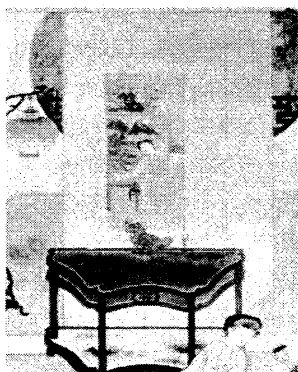


図29 李嬌兒盜財歸麗院(80回)

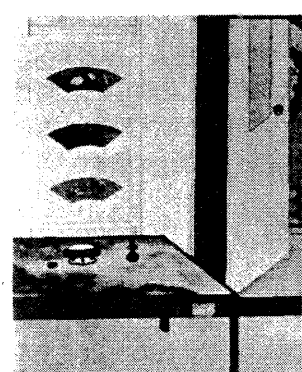
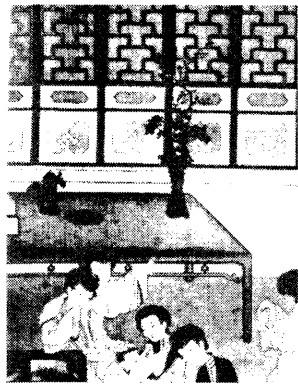


図30 潘金蓮售赴色東床(80回)



図31 獻芳樽内室乞恩(34回) 図32 兩孩兒聯姻共笑嬉(41回)



明代に書かれたとされるこの小説を最初に注目したのは、薰其昌、袁宏道などの文人である[15]。評価はさまざまであったが、おおむね市井の滑稽譚とされていた。清代末の魯迅の『金瓶梅』評(1920年代)には、写実性と時事の糾弾について書かれ、単なる市井の淫蕩小説ではないとされ、西門慶の官吏としての立場、上流階級や知識人との交遊を取り上げている。挿図に書格を示すことで、教養のある家、格式のある家が示され、明代における『金瓶梅』評との違いがみえる。

官哥(第六夫人の李瓶児の子)の弥月のお祝い(生後1ヶ月のお祝い)が、役人たちを招待して行われた(32回)。場所は、大庁である。捲棚内でお茶の接待あと、客間に八仙桌[16]を設え、食事をする。八仙桌は、祝宴などの際に8人が囲んで座る方桌である。八仙(八人の仙人)にまつわる故事があり、八仙桌には不老長寿の願いがこめられ、吉祥紋などで加飾された高価な桌子である。普段は、奥に納めてあるものを祝宴の際に、大庁の中央や屋外の庭園に設える。重陽の祝では、庭園の聚景堂に、八仙桌を据え、簾をおろし、祝宴を行った(61回)。一方、男性客を招いての重陽の祝いは翡翠軒で行われ、のち大庁に場所を移し、八仙桌を設え酒宴を行った。大庁や庭園は、非日常的な家具を設えることで儀礼の場所となる。

西門慶邸大庁において、西門慶と遊び仲間である應伯爵と雙陸(双六)をする场景の設えは、桌を囲み、椅子は、扶手椅(肘掛椅子)と条凳である(図33)。また、龐大姐[17]邸の大庁には、翹頭案と条凳が設えられるが(図34)、案上には花瓶など置かれておらず、条凳は日常的な家具であることがわかる。

李桂姐院の客間には、墩と春凳が陳設されている(21回、図35)。また、妓院(愛月軒)の客間の情景は、「上首列四張東坡椅、兩邊安二條琴光漆春凳(59回)」であり、客間には、長方凳よりも坐面の広い春凳が陳設され、その上に座椅子に類似した背凭れのある坐具がおかれていることがわかる(図36)。このことより、春凳は、主に妓院の客間に設える小榻の機能をもつ坐具であることが明らかである。

大庁は、邸宅内の内・外の境界の場所であり、非日常的な儀礼の場所としての役割があり、戲園(劇場)としても使用される。例えば、芸人を招き芝居を観る場面(63回)、これは明代の堂会(家庭内などで催す演芸会)の様子である(図37)。

室内を仕切る、隔ての設えとして、簾がかかる。それは、視線を廃し、俗事から仕切り、室内装飾、背景として使用されている。官客(男性客)を招いての公的な行事は、おもに大庁で行われることがほとんどであることが明らかであるが、これらの祝宴に夫人たちは、招かれず、大庁の入口や仕切られた場所から覗いている(図23, 24, 37)。住まいの「内」の存在である女性たちは、男性客の前には、儀礼の場合であっても、極力姿を見せないのである。大庁に呼ばれている女性たちは、唄をうたい、舞い、琵琶などの楽器を奏でる妓女たちである。夫人たちは、衝立や簾に身を隠して、芝居を見、音楽を聴くことができた。このように、家庭の女性たちは、公の場所では、男性の前には姿を現さないという旧中国の慣習がみられる。

5. 女性の住まいの室内と家具

正妻は正房(正室)、上房などと称され、妾は偏房(側室、粗室(63回)、房里(25回、41回)、第三房妾など)と称される。また、輿入れの際に付いてくる侍女を陪房(陪床、陪嫁丫頭)という。女性の地位がそのまま、「房」や「室」という場所を示す名称となっていることがわかる。

元代 楊顯之(撰) 鄭孔目風雪「酷寒亭」一卷に「偏房」の名称がみえる。闕名(撰)『張協狀元』元代、湯顯祖(撰)『牡丹亭』明代に正房の名称がある。女性の家庭内の地位は、住まう場所と密接な関係がある。

明代には、計成によって、造園技術書『園冶』が書かれ、その注釈書である、陳植『園冶注釈』[18]は、園林を学ぶ者にとって重要なテキストであるが、この書に園林(庭園)内の建物について書かれる、「室」は、古人謂半屋以後、其實者為「室」であり、もとは祭祀を行う部屋である。「房」は《釋名》より(漢代)上説「房」有「防」義があり、「它的作用、在於有所隱蔽而分内外、以為寢之所」であり、古くは、房(fang)は、防(fang)であり、外から隠れ、寝る場所とされる。

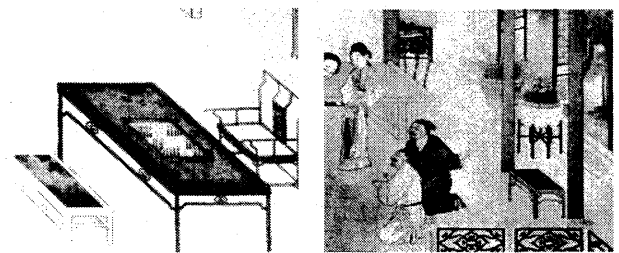


図33 應伯爵勸當銅鑼(45回) 図34 龐大姐埋屍托張勝(88回)

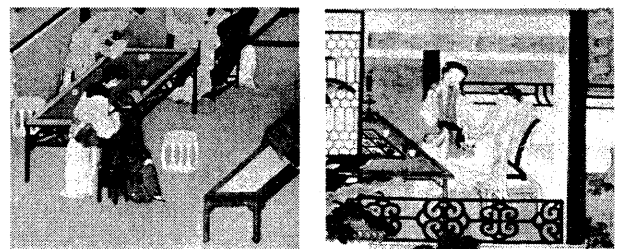


図35 應伯爵簪花邀酒(21回) 図36 西門慶露驚愛月(59回)

邸内に規則正しく配置される建物は、西門慶の妾(第二夫人以下第六夫人)を女主人とし、侍女によって構成された女性の住まいの場所である。複数の妾をもつ西門慶は、本来の自分の住まいである正房(上房とも称する、14回)から、その女性の住まいに通い、また別の女性の住まいに通う生活をおくる。それゆえに、女性の領域的区分が強くあらわれている。

妻妾たちの住まいは、一明両暗形式[19]の三間で構成される建物である。潘金蓮と李瓶兒の建物は、三間樓(2階建)であるが、そのほかの夫人たちの建物は、平屋建である。それぞれ、扉には門環、軒先には風鈴(鐵馬兒)がかかる(38回)。

清代の『金瓶梅』の挿図に女性の臥室に設えられる家具類がみられる(図38, 39)。図38は、扶手椅(肘掛椅子)に座った潘金蓮が鏡を見ている場景である。室内には、凳子2脚、梳妆台(化粧台)の上には、鏡と化粧箱が置かれ、隔ての家具として、屏風がある。寝台の手前には、腳踏(低い踏み台)がみえる。寝台は、架子床であり、帳がかかる。会話をする2名の女性は、文脈より侍女であることがわかる。図39は、吳月娘が扶手椅に座り、羅漢床に寄りかかる来保(下男)と会話をしている場景である。羅漢床の背後には挿屏(衝立型の屏風)があり、凳子3脚、書案(机)がある。客間の奥に臥室の寝台と花几(花台)がみえる。この正妻の寝台は、他の妾たちの寢室にある架子床とは異なり、大床であることがわかる。帳は、『金瓶梅』挿図にみえ(例えば、81, 97回の正妻の寝台の帳「梅花」の様子が描かれる。

客間、書齋(藏春閣)に設えられる凳子は、座面が円形で、脚が馬蹄形である(図40, 41)。

女性の部屋に設えられる凳子は、如圓凳、橢圓凳、六方凳、海棠式凳(図44)、扇面式凳(図43)などがみられ、明式家具様式の種類のなかでも意匠も多様で稀な形式である。海棠とは、バラ科の落葉低木のハナカイドウといわれ、中国原産の植物である。座面形は花をモチーフにしたものである。

挿図にみえる正妻の臥室の家具陳設図を図54に示す。

大床に類似した型式の寝台に拔歩床(八歩床ともいう、7回、八歩彩漆床91回)の名称がみえる。大床は、四方は壁により囲われている。拔歩床は、風が通るように壁はなく、枠だけの大きな寝台である。大床、拔歩床は、架子床と異なり、それ自体がひとつの場所(部屋)を形成する。内部には、鏡台や衣桁、化粧道具なども設えられる。

輿入れの際には、女性の寝台の帳は、孟玉樓の銷金帳(金糸の飾りのついた帳、7回)。潘金蓮の大紅羅圈金帳幔(9回)などのように、緋色である。日常の帳は、紫錦帳(李瓶兒、1月、16回)、青紗帳(潘金蓮、7月、10回)、紫紗帳(潘金蓮、6月、29回)、碧紗帳(潘金蓮、7月、18回)などのように青色や紫色である

李瓶兒の部屋の様子は、「隻兒沉烟繞金鼎、蘭火熱銀缸、錦



図38 潘金蓮臥室(83回)



図37 大厅 堂会の様子(63回)

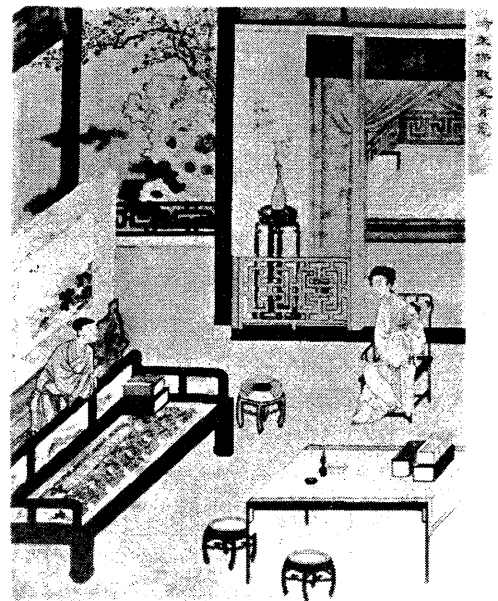


図39 正妻臥室(81回)

帳重圍, 玉釣齊下, 真是: 繁華深處, 果然別一洞天 (54 回)」とあり, 西門慶が女性の部屋へ訪問するとき, 女性の部屋は, 洞天すなわち仙界となる。新婚部屋は, 洞房ともよばれ, 外界(俗世間)から閉じられた「洞天」である。仙人(仙女)の住む典型的な場所は「洞天」とよばれる。

6. 隔ての家具と装飾性

古代の隔ての設えの記述は, 「掌帷幕幄帘綬之事」のとおり, 『周礼』にみえる。帷, 幕, 幄, 帘, それぞれ「とばり」の意であるが, 上にあるものを幕, 傍らにあるものを帷, 寝台などにはりめぐらしたものを帳, 帘は塵を除けるための小さなものをいう。それらは空間を分隔するためや冬季においては, 暖かさを保つために設える。住まいに使用される隔ての家具, 設えは, 主に屏風(衝立), 幕, 簾, 寝台を覆う帳である。それらは, 日常的な設えと非日常的な設えと区別して使用される。客間においては, 接客の場所を区画し, 臥室においては, プライバシーを保ち, 死の儀礼[4]の際には, 棺の安置の場所から穢れが拡がらないように区画される。それらは, 色や描かれる絵(例えば人物, 山水, 花鳥など)によって, 象徴的に場所を囲み, 儀礼性を決定づけている。

頤美図の屏風に描かれる絵を比較すると, 大厅(図 49, 51)に設えられる屏風は, 山水画や太湖石が主なモチーフであり, 女性の部屋(図 52, 53)に設えられている屏風は, 花鳥が主なモチーフであることがわかる[20]。

太湖石に空いた孔は, 洞窟を意味し, ひとつの太湖石の中に別世界があると考えられていた。中野美代子氏は, 「山水画では, 悠久の時間が空間を支配する。幽邃の境をさまよう

時間が永遠につづくことを望む中国人の願望の表現であり, (略)民間人が願望した不老不死の神仙境の表現であった」と山水画と神仙境との関わりを指摘する[21]。別世界を表現する太湖石や山水画は, 自然の凝縮であり, 仙人の住む仙界であり, 永遠の世界である。それは, 聖なる知恵や道徳心を生み, 不老不死の願いに通じる。客間や庭園に設えた屏風に描かれた山水画や太湖石は心を生み, 不老不死の願いに通じる。客間や庭園に設えた自然そのものであり, それを設えることで, 場所を囲み, 聖域をつくり, もっとも理想とする風景を室内に取り込むための装置である。非日常的な囲いにより, 儀礼の場所が形成される。それに対して, 花鳥画は, 子孫繁栄(男子誕生)を象徴する梅, 牡丹, 蓮などの草花や鴨などの



図 46 茶房(2 回)

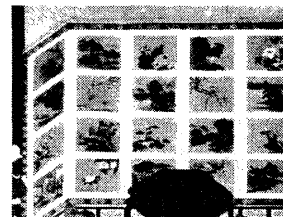


図 47 孟玉樓邸大厅(7 回)

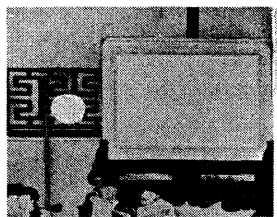


図 48 妓院(11 回)

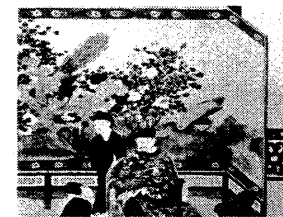


図 49 蔡の屋敷大厅(18 回)



図 50 妓院(99 回)



図 51 西門慶邸大厅(66 回)



図 40 西門慶書房賞雪(67 回)



図 41 西門慶觀戲動深悲(63 回)

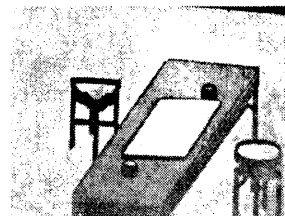


図 42 開茶坊鄆哥義憤(4 回)

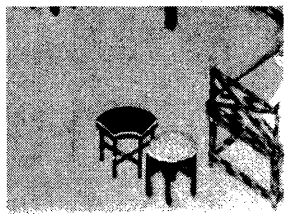


図 43 花子虚因氣喪身(14 回)

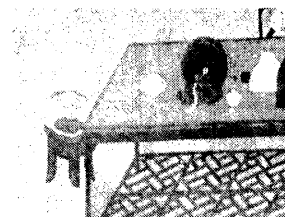


図 44 争籠愛金潘闕氣(43 回)

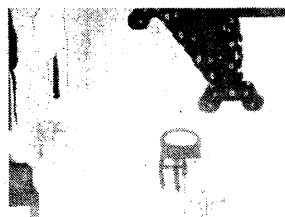


図 45 兩孩兒聯姻共笑嬉(41 回)

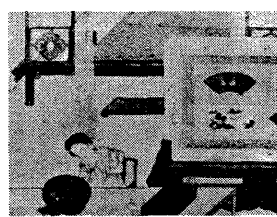


図 52 潘金蓮卧室(83 回)

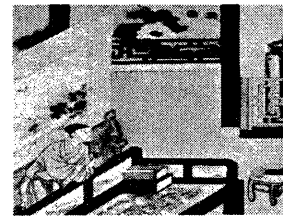
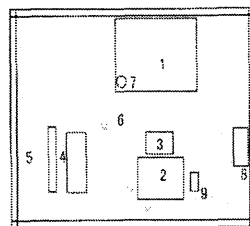


図 53 正妻卧室(81 回)



- | | |
|-------|------|
| 1 大床 | 5 椅子 |
| 2 書案 | 6 凳子 |
| 3 扶手椅 | 7 花几 |
| 4 羅漢床 | 8 香几 |
| | 9 茶几 |

図 54 正妻の卧室 家具陳設図

家族の繁栄を願う吉祥シンボルの図である。それは女性たちが担う役割に深く関わる。

8. まとめ

本稿は、『金瓶梅』にみえる、建築的場所の解明を大厅と女性の住まいに設えた、家具類を中心に行った。

その住まいにおける、象徴的な場所は、儀礼の場所である正房であり大厅である。それらの場所は、非日常的な家具を陳設し、幕や帳を設えることで、儀礼的な機能をもつようになる。大厅に設える、隔ての家具である屏風は、山水画や太湖石が主なモチーフであることがわかった。

女性たちの生活の中心となる場所は与えられた「内」なる女性の住まいである。家庭の女性の領域は、特定の男性の訪問がある場所であり、それは、男性にとっては、住まいの中の「外」から「内」の妻妾たちへの日常的な訪問の場所である。その領域は、帳によって囲われることで擬似的仙界となり、妻妾たちにとっては、非日常的な夫の訪問である。その場所は、帳や簾によって空間の連続性が分断され、場所が閉ざされ、隔離されることで、非日常的な場所となる。隔ての家具である屏風は、花鳥が主なモチーフであることがわかった。女性の住まいは、閉ざされた場所であり、それは、男性にとっては、仙女が住む仙界(理想郷)である。

日常的場所に、儀礼的な設えや祝宴などの特別な設えをすることで、非日常的な儀礼の場所となる。すなわち、室内の設えと家具類が、儀礼性および部屋の機能と意味を決定する。

謝辞

本稿の作成にあたり、北海道大学名誉教授・中野美代子氏より貴重な資料と助言をいただいた。ここに記して感謝の意を表します。

註および参考文献

- [1] 大阪市立大学中国文学研究室編『中国の八大小説』, pp. 243-252, 平凡社, 1965
- [2] テキストとして、『金瓶梅詞話校註』, 白維国 ト鍵校註, 兵麓書社, 1995 を使用。補足として, 全訳本(全100回)『金瓶梅』, 小野忍・千田九一訳, 平凡社, 1994 を使用した。
- [3] 清宮皇子の教育用とされる清宮宮廷秘蔵『清宮珍宝百美图』および明代崇禎本挿図(版画), 瀧本弘之編『金瓶梅/紅樓夢挿図集成』, 遊子館, 2003 を参照。『清宮珍宝百美图』の写真複製本は, 北海道大学名誉教授・中野美代子氏蔵本による。
- [4] 藤原美樹, 松本静夫『『金瓶梅』にみられる住まいの空間構成と女性の領域に関する研究-結婚の儀礼について-』, 福山大学工学部紀要第27巻, pp. 111-116, 2003. 12。『『金瓶梅』にみられる住まいの空間構成と女性の領域に関する研究-誕生と死の儀礼について-』, 福山大学工学部紀要第27巻, pp. 117-122, 2003. 12。『『金瓶梅』にみられる住まいの空間

構成と女性の領域に関する研究-妾と妓女の領域-』, 日本建築学会中国支部研究報告集, pp. 981-984, 2004. 3 など

- [5] 文震亨『長物志3』, 荒井健ほか訳注, pp. 57-58, 平凡社, 1999
- [6] 知識階級であり, 儒教經典の教養の保持者を士大夫という。彼らは詩文を読み, 作り, 筆墨紙硯を吟味し絵画, 骨董など広く趣味をもつ。文人というのは士大夫の私的な場におけるあり方をいう。「琴棋書画」は文人趣味の中心である。荒木健『シャルパンティエの夢』, pp. 7-14, 朋友書店, 2002
- [7] 王世襄編著『明式家具研究』, 三聯書店, 1989 の分類表を参照した。
- [8] 明式家具学会『明式家具研究彙刊』, 2002
- [9] 石丸進, 石村真一「中国古典様式家具の日本への影響に関する研究-座臥具の牀・榻・凳を中心として(2)-」, p. 6,
- [10] 張家驥『中国建築論』, pp. 103-104, 山西人民出版社, 2003
- [11] 堂前有兩山而无前后牆的敞軒, 部屋の前後に壁がなく, 兩山(2枚の山型の壁)のみがあり, 開放的な建物。張家驥『中国建築論』, pp. 323-326, 山西人民出版社, 2003
- [12] 上海市紅樓夢学会, 上海師範大学文学研究所編『金瓶梅鑑賞辞典』, p. 707, 上海古籍出版社, 1990
- [13] 前掲[12], p. 701
- [14] 前掲[7], p. 50
- [15] 『金瓶梅』, 小野忍・千田九一訳, pp. 441-443, 平凡社, 1994
- [16] 四仙卓や板卓は, 普通食事室に置かれる食卓であるが, 八仙卓は正方形の接客用の卓である。
- [17] 春梅は, もとは吳月娘の侍女であったが, 潘金蓮の輿入れに伴い, 潘金蓮付きの侍女となる。しかし, 西門慶死後, 陳経済と密通し, 吳月娘によって売られてしまう。そのうち守備府の長官の妾となり, やがて正妻の地位を手に入れる。
- [18] 計成原著『園冶注釈』, 陳植注釈, 中国建築工業出版社, 1996
- [19] 中央の明間(客間)と両側の暗間(寝室)の三間で構成される。34回など。
- [20] 図47に示す, 孟玉樓邸大厅に設える屏風は, 大厅にもかかわらず, 花鳥画であることについて, 邸宅の主人が女性であるためと考える。
- [21] 中野美代子『悪魔のいない文学 中国の小説と絵画』, pp. 105-108, 朝日新聞社, 1977

図版出典

- 図1-19 明式家具学会『明式家具研究彙刊』, 2002
- 図20, 21 王世襄編著『明式家具研究』, 三聯書店, 1989
- 図22 張家驥『中国建築論』, p. 324, 山西人民出版社, 2003
- 図23 瀧本弘之編『金瓶梅/紅樓夢挿図集成』, 遊子館, 2003
- 図24-53 清宮宮廷秘蔵『清宮珍宝百美图』, 写真複製本
- 図54 筆者作図